北から南から

「言語聴覚士の仕事と東住吉時代に学んだこと」

田中　多賀子　（旧姓「丸尾」 普通科 17 期生：大和大学白鳳短期大学部教授）

高校・大学卒業後、リハビリテーションセンターの福祉職に就きましたが、子どもが聴覚障害を負ったことを機に言語聴覚士（Speech Therapist, 以下 ST）の道を歩み始めました。現在は短期大学の教員として ST 養成に携わり、並行して福祉現場でコミュニケーションの問題を持つ子どもや成人、御家族の相談支援も行っています。

ST とは何か一言で表すと、ことば・きこえ・のみこみのリハビリ訓練士ということができます。リハビリの専門家の代表として、PT（理学療法士）や OT（作業療法士）があげられ、病院や高齢者施設の訓練室で運動している患者さんや支援している療法士の姿を見かけることも多いと思います。PT、OT は主に姿勢や手足の運動・感覚の機能回復のリハビリを実施しています。それに対して、ST のリハビリは主に首から上が対象になります。すなわち、言語・聴覚・摂食嚥下の運動・感覚の機能回復に繋がる支援です。更にリハビリテーションで忘れてならないのは、訓練だけで終わるのではなく、語源である「リ・ハビリス：尊厳ある人間性（命、生活、人生）の獲得と回復」に繋げることです。障害や加齢による機能低下で、人としての誇りが失われることのないよう訓練と社会の環境調整に努めることが求められます。

振り返れば、人としての誇りを持つことの大切さは、東住吉時代に学びました。入学した 1971 年は、校庭には平和や友情がテーマの学園ソングや校内の民主化・制服自由化を訴えるプチ演説が溢れ、前に立つ先輩らの姿を眩しく感じたものです。そんな影響も受けた 17 期生の 3 年次体育祭後の熱気冷めやらぬ時期に出した訴えが、対峙しつつも見守って下さった先生方に承認されました。こうして、先輩からの悲願の制服自由化が実現したのでした。自他や周囲の尊重、意見発信の大切さを学んだことは、今の仕事の基盤「障害を持つ人の権利に思いを馳せ、支援すること」に繋がっているように思います。

ホームカミングデイ　豚汁といなりでチャリティー 100km リレーマラソンを支援

2024(令和 6) 年 11 月 9 日（土）雲ひとつない快晴の下、チャリティー 100km リレーマラソンが開催されました。

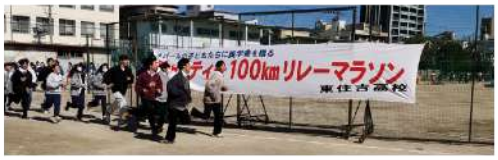
緑友会は例年参加者支援のためエイドステーションを運営していて、その日を文化祭とともにホームカミングデイと位置付け、OB・OG の参加を呼び掛けてきました。

今年は、いなりずしと豚汁を提供しました。食材はチャリティーマラソン参加者＋関係者を考慮して 560 人分を発注しました。野菜は前日に下準備をして、鍋ごと具材別に分けて袋詰めに、肉といなりは当日スーパーに予約したものを緑友会事務局中心に搬入しました。いなりについては、2 個ずつ詰め直しました。

準備に協力いただいたみなさんには朝早くから参加いただき、いなりの小分け作業や豚汁づくりに携わっていただきました。

今回はスタッフ以外に、21 期生 5 名に来ていただき、うち 1 人は調理師免許をお持ちでした。皆様のご協力のもと、無事に終えることが出来ました。感謝いたします。

チャリティーマラソンがはじまると、それぞれ走り終えた現役生がやってきました。生徒の取次の整理は吉川先生にお願いしました。ゴマ油とショウガの香りが効いた豚汁は、生徒には好評でした。参加者配布後の「おかわりタイム」には 50 人以上の列ができ、ネギ 1 つ、汁の一滴まで残さず平らげてくれました。「美味しかった！ごちそうさま！」と顔をほころばせる様子にこちらも嬉しい気持ちでいっぱいになりました。



チャリティー 100km リレーマラソンは当初から担当されていた先生が退任され、来年からの開催や支援はどうなるのかと思っていたところ、その先生から若い先生お二人を紹介され、「私たちが受け継ぎます。引き続きご支援ください」とごあいさつをいただきました。学校、生徒と交流が持てる機会がこれからも続き、支援の輪が広がることを願っています。